

社会で活躍する
OB
インタビュー
No.10

人の人生に寄り添う

牧師 下村 明矢さん



発行所 灘校新聞委員会
〒658-0082
神戸市東灘区魚崎北町8-5-1
発行責任者 登阪 亮哉

-STAFF-

- 馬直章 琴汰哉 航遥 叢寿一 翔平 音
- 聡政 智真 侑亮 越和太 秀和
- 野野口 坂谷 阪西 護 井富林
- 小野 北小 城登 中比 野谷 上 横吉 若
- 牧水 村 吉若 物袋 正雄
- 谷口 林太郎

信仰で人生が豊かに 聖書に涙して

「灘校生時代はどのような生徒でしたか。」

「いたずらが好きでした。自分では『間違ったことを正している』と思っていました。今から思うと人が困るのを何とも思わない子でしたね。」

「キリスト教に出会ったのはいつですか。」

「母が信徒でしたが、僕が本当に信仰に進んだのは、大学生の時、同級生の女の子と中国に行ったときです。彼女は元々熱心なクリスチャンで、聖書を中国に運び込む運動

をしていました。僕はそのれを知らずに中国に行っ

たのですが、夜中に小さな教会に聖書を運ぶのを手伝うことになりました。当時の中国ではこれは危険なことでした。そこで会った人達は僕を持って

いるモチベーションと真逆のものを持っていました。それはなぜか知りた

いと思ったのが信仰に進んだきっかけです。また、僕は大学の時、合気道をやっていました。ある時、試合で勝って、自分

がっていました。そんな時、教会の説教で、『人の

いのちを損じたら、何の得がありません。自分の命を買い戻すために、人は一体何を差し出すこ

とが出来てしょう(マルコによる福音書 8:36・37)』人がその友

のために命を捨てるという、これよりも大きな愛は誰も持っていないと、誰か

思ったからです。僕が本

当に信仰を得たのはこのときです。『どうして牧師になろうと思っただけでしょうか。60才の定年が近づきこ

れからの人生を考えたとき、定年退職した後はどうなるのだろうか考えま

した。当時は余りに忙しく、自分の時間を確保したいとも思っただけです」

共に泣き、共に喜び

仕事です。一緒に悲しむのは確かに辛いですが、それによって喜びを得られる人がいるのですから辛さは辛さではありません。そういった時に慰めの言葉を与えてくれるのが聖書です。生きていく中には人間関係で苦しむこともあれば、死の恐怖

「牧師の仕事とはどのようなことですか。」

「『牧師』という言葉の『牧』は牧羊を表しています。神様の代わりに色々な人の悩みを聞き、その人の人生に寄り添うのが仕事です。誕生・結婚・死という三つの大きな出来事をその人と共に過ごすことになります。」

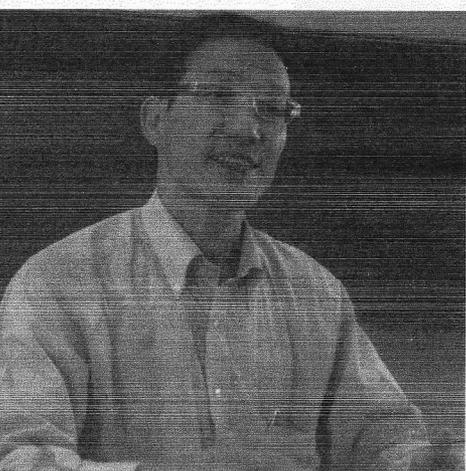
「牧師の仕事をしていて辛いことはありませんか。」

「泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜ぶのが僕の仕事です。一緒に悲しむのも喜びを得るのも、死んでからどこへ行くのか分からない、という不安に対し、聖書は一つの答えを示してくれ、これによって心に平安を持つことが出来ます。これによって得られる平安は、特に病気の人の人にとってはこの上ない贈り物になります。自分が平安を持っていれば、相手にも平安が伝わります。」

共に喜び

「『人の人生に寄り添う』ということを考えると、今の日本社会にはそれが

足りていません。核家族化で、自分の老いや病にも添えなくなっている。回り回って自分の幸せを保障できなくなっています。ただ、震災の前と後では随分変わりました。同僚との関係よりも家族との関係を優先し、仕事以外の人間関係に余力を使う人が増えていきます。日本は、これだけ経済が発達しているのに無宗教という珍しい国です。日本人は宗



下村 明矢
本校30回生。

大学時代にキリスト教への信仰に目覚める。大学卒業後2年間伊藤忠商事で務め、のち、田島ルーフィングへ転職。数年前に神学校を卒業し、牧師の資格を取る。現在、東京プレジャーセンターの理事を務め、朝夕のお祈りや昼の礼拝を担当するほか、信徒として中高生に教会学校をしている。



(文責 村上)